

「トントン くぎうち コンコン ビー玉 (中学年)」

授業者 戸田市立笹目小学校 長尾 宏一

1. 大会テーマおよび題材について

本題材の活動は、ビー玉を転がすコースを子供たちが協力してつくるよさや楽しさを味わうと共に、くぎ打ちの知識及び技能を獲得するものである。

中学年の児童においては、金槌で釘を打つ経験が初めて、あるいは少しだけの子供がほとんどだと思われる。その子供たちにとって、金槌で釘を打つ活動は多少の不安はあるが、わくわくする活動であることが想像できる。そして、ビー玉が面白く転がるコースをグループで協力してつくるという目標に向けて、アイデアを出し合ったり、釘の打ち方を教え合ったりする活動そのものを楽しむことが期待できる。また、できあがったコースにビー玉を転がして楽しむことは、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養うことにも繋がると考える。

一方、金槌で釘を打つことについての知識と技能を獲得させるには、まず金槌と釘の扱いを教える必要がある。導入において、釘打ちをやって見せながら基本的なことだけを押さえるが、それは「見て、聞いた知識」でしかない。大事なものは、実際に自分で釘を打ち、その感覚や行為を通して理解することであり、行為を繰り返す中で、その知識と技能を更新して、より深いものにするのである。

したがって、この学習の導入においては、ビー玉がコースを転がる様子を見せ、グループで協力しておもしろいコースをつくることを提案した後、金槌で釘を打つ技能の基本をやって見せたい。活動においては、協力して創造することのよさや楽しさを感じることで、釘打ちについての知識・技能を更新し高めることの中にある学びを大切に子供たちを見守り、支援していきたい。

2. 本題材のねらい

- 釘の打ち方を自分の感覚や行為を通して理解し、釘の打ち方や材料のつけ方を工夫してつくる。(知識・技能)
- ビー玉が面白い転がり方をするコースをみんなで考え、つくりながら見方や方感じ方を深めて、自分が表したい表現をめざそうとする。(思考力・判断力・表現力)
- 細長い板に釘や材料を打ち付けて、ビー玉が面白く転がるコースをみんなで協力してつくる楽しさや心地よさを味わう。(学びに向かう力・人間性等)

3. 本題材の指導過程（1時間扱）

準備 板材(1×4 木材 19×89×1820 mmまたは2×4 木材 38×89×1820 mm)、釘(25mm～38mm で3種類)、ビーズ、瓶の王冠、カラー輪ゴム、ビー玉、金槌、釘抜き、ペンチ

学習活動	指導の内容と留意点
<ul style="list-style-type: none"> ○ビー玉がコースを転がる様子を見て、本時の活動内容を知る。 ○金槌と釘の基本的な扱い方を知る。 <ul style="list-style-type: none"> ・釘の抜き方についても理解する。 ○グループでアイデアを出し合いながら協力して、面白いビー玉コースをつくる。 <ul style="list-style-type: none"> ・「ビー玉があっちへ行ったり、こっちへ行ったりすると面白いね。」 ・「途中で外に飛び出さないようにしないとね」 ・「ビー玉がジャンプするようにできないかな。」 ○コースがある程度できたら、ビー玉の転がり方を試し、より面白い転がり方を追求する。 <ul style="list-style-type: none"> ・「ここでビー玉が止まってしまうね。釘を打ち直そうか。」 ・「手前に釘を打って転がる方向を変える方法もあるよ。」 ・「ビー玉がコースアウトしちゃうよ。もっと釘をたくさん打とうか。」 ・「輪ゴムをかければ、簡単にできるよ。」 ○全グループのビー玉コースを並べて、ビー玉の転がり方の違いを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ビー玉が面白く転がるコースをグループで協力してつくることを提案する。 ○釘打ちと釘抜きを教師が実演して、その安全な扱いについても理解を深める。 <ul style="list-style-type: none"> ・金槌や釘などの使い方についての図説を掲示する。 ○細長い板材と釘、打ち付ける材料などをグループごとに準備しておく。 ○アイデアを出し合うのは釘を打ちながらでよいことを伝える。 ○釘打ちが上手くできない子には、その様子に対応した支援をする。 ○ビー玉の転がり方を試して、グループで改善の仕方を話し合い、協力して作り直す活動を大事にする。 <ul style="list-style-type: none"> ・ビー玉を転がす面白さに夢中になってしまっている場合は、ビー玉が最後まで転がらない原因と解決策を考えるように促す。 ・ビー玉は最後まで転がる場合は、もっと面白くすることに注目させる。 ○ビー玉の速さを競うのではなく、転がり方の楽しさに注目させる。







